2Qp-9　　高齢者と介護用食具の実態調査と使用に関する研究

○駒場千佳子　　高橋敦子
（女子栄養大学）

目的　高齢化社会に伴い介護を必要とする高齢者のいる家庭が増えつつある。食事の自立をはかり、介護者の負担の軽減するための介護用食具の必要性が高くなると考え、市販されている介護用食具と料理について、高齢者施設での実態調査とあわせて、本研究をおこなった。

方法　２２ヵ所の高齢者施設の栄養士を対象に留め置き法でアンケート調査（使用食具の実態、食器選択における意識について、介護用食具等の意識について）を行った。高齢者施設で好まれる料理６種について、５種の食器と６種の食具（はし、スプーン、フォーク、介護用スプーン３種）のそれぞれの使いやすさと、使いやすい食器の形について官能検査を行い、検討した。

結果　施設での介護用食具の使用率は低いが、介護用食具を必要であると答えたのは７１．４％であり、理由として食事の自立が多くあげられていた。又、食器選択の条件は、すくいやすく、こぼしにくく、安定感のある形、見て楽しめる色や柄が多くあげられていた。食器と箸、スプーン、フォークとの組み合わせでは、「縁の丸みとスプーンの形が一致する」「縁に立ち上がりに高さががある」「安定感があり動かない」ものが適しているとわかった。